

2015年度  
世 界 史  
(問 題)

〈H27090018〉

注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. マーク解答用紙記入上の注意
  - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、試験開始後、解答用紙の氏名欄に氏名を正確に丁寧に記入すること。
  - (2) マーク欄には、はっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	<input checked="" type="radio"/> 良い	<input type="radio"/> 悪い	<input type="radio"/> 悪い
マークを消す時	<input type="radio"/> 良い	<input type="radio"/> 悪い	<input type="radio"/> 悪い

5. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
7. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

I 次の文章を読み、問1～10について、各設問の指示に従って選択肢の中から解答を選び、その記号をマーク解答用紙にマークせよ。

ユーラシア大陸では、古くから陸・海路を利用した、ヒト、モノ、カネ、情報などの相互作用を通じて、広範囲に及ぶ東西文化の交流と文明・国家間の相互発展が生じていた。

(A) 東アジアでは、中国の歴代諸帝国が、東西間の広域交通・交流において中心的な役割を果たした。近隣の地域・国家は、時にこれら中華帝国による遠征や支配を経験したが、その一方で、中国との交流・交易を通じて政治的、経済的、文化的発展を遂げた。また、インド・中国間の交易ルートの中に位置した東南アジアでは、交易の要衝として多くの国家が勃興し、繁栄した。

ユーラシア大陸における東西地域世界の拡大と発展に、騎馬遊牧民族が果たした役割も大きい。例えばフン人は、4世紀から5世紀にかけて西進し、ヨーロッパ世界を大変貌させ、アジア東部の騎馬遊牧民族も、北辺から中国をたびたび脅かし、漢や唐などの帝国と攻防を繰り返して、アジア地域全体に大きな影響を及ぼした。

7世紀以降、イスラーム教がユーラシア大陸における広域経済・文化の変化・発展に及ぼした影響も大きい。イスラーム教は、中央アジア、北アフリカ、インド、さらには東南アジアなどで急速に受容され、多様なイスラーム文化を創出した。また、西ヨーロッパも、とくに十字軍の遠征を契機としたイスラーム世界との衝突・交流を通じ、政治、経済、文化、科学技術など社会全般において重大な影響を受けた。

さらに、モンゴル帝国の成立とその東西にわたる征服活動が、ユーラシア大陸全体の一体化に果たした役割は極めて大きい。モンゴル帝国が発展・繁栄したことで、大陸東西両域をまたぐ長距離交流・交易はますます盛んになった。

こうしたユーラシア大陸東西間の摩擦・衝突、あるいは交流・交易を通じて伝播した、多様な知識・技術に支えられて、その後西ヨーロッパ諸国が主導する大航海時代が、近代における世界の一体化、さらにはグローバル化への幕を開けることになった。

問1 下線部(A)に関する次の記述のうち適切でないものを1つ選べ。

- 後漢の和帝のころ、班超により大秦国に向かうよう命じられた甘英は、条支国(シリア)まで到達したところで断念して帰国したと伝えられている。
- 2世紀の中ごろ、海路を経て後漢の日南郡にローマ皇帝(中国史書では「大秦王安敦」)の使節と称する者がやってきたと伝えられている。
- 後漢の和帝のころ、宦官の蔡倫によって改良されたといわれる製紙法は、後にイスラーム圏を経てヨーロッパに伝えられた。
- 唐の首都長安には西方の文物が伝わり国際的な文化が発展していたため、朝鮮半島や日本などの周辺諸国も使節を派遣し、その文化や制度を積極的に取り入れた。
- 唐にやって来た阿羅本によって布教されたニカイア派キリスト教は、唐では景教と呼ばれ、その寺院ははじめ波斯寺と呼ばれたが、後に大秦寺と改称された。

問2 下線部(B)に関する次の記述のうち適切なものを2つ選べ。

- 秦の始皇帝は南越に遠征して華南・ベトナム北部にまで領土を広げ、南海・象・桂林の3郡をおいた。
- 前漢の高祖は南越を征服し、ベトナム北部を支配下に入れ、南海など9郡をおいた。
- 前漢の武帝は衛氏朝鮮を滅ぼして、朝鮮北部に楽浪・真番・臨屯・玄菟の4郡をおき直轄地とした。
- 三国時代に魏・蜀・呉のうち最も有力で、華北の大半を支配した魏は、百済を討ち、朝鮮の楽浪・帯方の2郡を領域に加えた。
- オゴタイ=ハンは東南アジアへの遠征を企て、ベトナム・カンボジア・ミャンマー・ジャワに侵攻した。

問3 下線部(C)について、中国と近隣諸国の交流に関する次の記述のうち適切なものを2つ選べ。

- a. 唐代に、新羅の商人は活発な海上交易活動を展開し、山東半島や華中の港市に新羅人の居留地が作られた。
- b. 日本から遣唐使として派遣された阿倍仲麻呂は、唐の朝廷に仕え、安西都護を務めた。
- c. 鎌倉時代の日本では、宋磁の影響を受けて、肥前では有田焼の生産が発展した。
- d. 高麗では、中国を経て伝えられた仏教が国教として厚く保護され、高麗版大蔵経が2度にわたり刊行された。
- e. 禅宗の代表的宗派である臨済宗と曹洞宗は、いずれも室町時代に中国から日本に伝えられた。

問4 下線部(D)について、東南アジアに興った国に関する次の記述のうち適切でないものを1つ選べ。

- a. 1世紀末ごろメコン川下流域に建国された扶南は海上貿易で栄えたが、6世紀半ばに北方に興ったクメール人国家の真臘に圧倒され、7世紀中ごろに滅亡した。
- b. 7世紀ごろスマトラ島のパレンバンを中心に成立したシェリーヴィジャヤ王国は、海上貿易で繁栄し、唐・宋とも通交した。
- c. 8世紀半ばに中部ジャワに興ったシャイレンドラ朝は、大乘仏教を奉じ、壮大な仏教寺院であるポロブドゥールを建造した。
- d. 11世紀の半ばにイラワディ川下流域にモン人が開いたバガン朝では、スリランカとの交流などにより上座部仏教が広まった。
- e. メコン川中流域にクメール人が開いたアンコール朝では、スールヤヴァルマン2世がアンコール=ワットを建造し、ジャヤヴァルマン7世がアンコール=トムを増築した。

問5 下線部(E)について、漢と騎馬遊牧民族との攻防に関する次の記述のうち最も適切なものを1つ選べ。

- a. 前漢の初代皇帝劉邦は、北方のモンゴル高原において冒頓単于の下で強大になった匈奴に侵入されたがこれを撃退した。
- b. 武帝は、將軍の衛青・霍去病らに命じて数度にわたる匈奴への攻撃を行い、その結果、漢はオルドスや河西地方に勢力を伸ばした。
- c. 宣帝が、大月氏と同盟して匈奴を挟撃するため張騫を西域に派遣したことをきっかけに、漢はタリム盆地のオアシス諸都市にまで支配を拡張した。
- d. 前60年ころ東西に分裂した匈奴のうち東匈奴は、前漢の西域都護であった甘延寿の攻撃によって滅亡した。
- e. 48年に南北に分裂した匈奴のうち北匈奴は後漢に服属したが、後に五胡の1つとして華北に侵入した。

問6 下線部(F)について、唐と騎馬遊牧民族との攻防に関する次の記述のうち適切でないものを1つ選べ。

- a. 唐の第二代皇帝太宗は東突厥を破り、西北遊牧民の首長から天可汗の称号を贈られた。
- b. 高宗の時代に唐は、高句麗・百濟を滅ぼし、西突厥・ベトナムを攻撃して唐代最大の領土を獲得した。
- c. 一度唐の支配下に入った東突厥は、682年に唐の支配から離脱して再びモンゴル高原に強大な国家を樹立した。
- d. トルコ系のエフタルは、744年に東突厥を滅ぼし、モンゴル高原を拠点とする大帝國を樹立した。
- e. ウイグルは、安史の乱の際に唐に援軍を送るなど強勢を誇ったが、840年にトルコ系のキルギスの侵入を受けて滅亡した。

問7 下線部 (G) に関する次の記述のうち最も適切なものを1つ選べ。

- a. 632年にムハンマドが没すると、クライシュ族の長老アブー＝バクルがカリフの地位をムハンマドから継承した。
- b. 日常生活の規範とされたイスラーム法（シャリーア）は、『コーラン』と預言者の言行（シーア）に基づいて9世紀ころまでに整えられた。
- c. 立法や法の解釈にはウラマーと呼ばれる知識人・学者が携わるようになり、彼らは政治的・社会的に重要な役割を演じるようになった。
- d. アッバース朝時代には、地租と人頭税は征服地の先住民だけに課せられ、彼らがイスラーム教に改宗しても免除はされなかった。
- e. スンナ派の「四正統法学派」は、シャーフィイー派・マリーク派・十二イマーム派・ハンバル派の法学派から構成される。

問8 下線部 (H) に関する次の記述のうち適切なものを2つ選べ。

- a. 9世紀後半、東トルキスタンにトルコ系のサーマーン朝が建国され、領内に住むトルコ人のイスラームへの改宗が著しく進んだ。
- b. 10世紀半ば、イラン系のカラ＝ハン朝がサーマーン朝を滅ぼし、東・西トルキスタンを併合したことで、イラン人のイスラーム化が進んだ。
- c. 11世紀以降、ベルベル人は急速にイスラーム化し、モロッコを中心にムラービト朝とムワッヒド朝を興した。
- d. 15世紀に、ジャワ島西南部のマラッカ王国の国王がイスラームに改宗したことは、東南アジアでのイスラームの普及に大きな影響を及ぼした。
- e. スマトラ島北端のアチェ王国は、イスラーム王国として香辛料貿易で栄えたが、20世紀初頭にオランダの支配下におかれた。

問9 下線部 (I) に関する次の記述のうち適切でないものを1つ選べ。

- a. 1206年に、オノン川上流で開かれたクリルタイでモンゴルの指導者テムジンがチンギス＝ハンの称号を受け、モンゴル帝国が誕生した。
- b. タングート族族長の李元昊が興した西夏は、チンギス＝ハンの遠征により1227年に滅亡した。
- c. オゴタイ＝ハンは、1234年に金を滅ぼして華北を支配下に収め、1235年にカラコルムに首都を定めた。
- d. ジュチの子バトゥはヨーロッパに遠征し、1241年にワールシュタットでドイツ・ポーランド諸侯連合軍を破った。
- e. グユグ＝ハンの弟フラグは西アジアに遠征し、1258年にアッバース朝を滅ぼしてイランを中心にイル＝ハン国を建てた。

問10 下線部 (J) に関する次の記述のうち適切なものを2つ選べ。

- a. チンギス＝ハンが創設し、オゴタイ＝ハンが制度化した駅伝制（ジャムチ）は、東アジアからヨーロッパに至る陸路による交易を促進した。
- b. 元においてイスラームの天文学を取り入れて郭守敬によって作られた授時暦は、江戸時代の日本においても貞享暦として導入された。
- c. 元の統治下で杭州、泉州、広州などの港市が繁栄し、黄河上流から遼東半島を回り大都に至る海運も発達した。
- d. ローマ教皇はプラノ＝カルピニ、イギリス王リチャード1世はルブルックを使節としてモンゴルに派遣した。
- e. キプチャク＝ハン国はその初期にキリスト教を保護し、ヨーロッパのキリスト教諸国やローマ教皇庁と使節を交換した。

## II

次の文章を読み、問1～10について、各設問の指示に従って選択肢の中から解答を選び、その記号をマーク解答用紙にマークせよ。

西ローマ帝国が476年に滅亡したことは古代地中海世界の崩壊を意味した。ヨーロッパは大きく東と西に分かれ、異なる歴史的発展を遂げた。  
(A)

東ヨーロッパではビザンツ帝国が中央集権的一元支配を維持していたが、西ヨーロッパでは民族移動による不安定な状況が続いた。8世紀になってフランク王国が強大化したことで秩序を回復したものの、その安定は永続的なものではなく、ヴァイキング（ノルマン人）の侵入などもあって混乱の時代が続いた。商業と都市は衰え、農業を基本としたほぼ自給自足の自然経済が支配した。この時代の西ヨーロッパ社会は荘園制と封建的主従関係のうえに成り立ち、封建社会と呼ばれる。  
(B) (C) (D) (E)

11世紀に入ると封建社会は安定と成長の時代を迎えた。農業技術の進歩により農業生産が増大し、人口も飛躍的に増えた。人びとの活動は活発化し、商業が盛んとなり、都市が繁栄した。さらに12世紀ルネサンスと呼ばれるように文化が大きく発展し、各地で大学も誕生した。ヨーロッパ中世世界はキリスト教と密接に結びついており、学問の中心も神学にあった。神学はアリストテレス哲学の影響を受けてスコラ学として発展した。キリスト教の影響は美術にも及んでいたが、とくに注目されるのは教会建築で、各地に聖堂が建設された。  
(F) (G) (H) (I)

繁栄をみた封建社会は14世紀ころから衰退する。貨幣経済の浸透は荘園を基礎とする経済体制を崩した。さらに寒冷化や黒死病の流行などで農業生産、農業人口が減少し、農業社会は動揺を見た。教皇権が衰退し、封建貴族が没落する一方で、都市の大商人らが安定した経済圏を求めたこともあって、国王権力が強まり、中央集権化が進む国もでてきた。他方で、分裂状態が続き、統一が進まない国もあり、国家統合の進展は各地で異なった。  
(J)

問1 下線部（A）について、地中海の歴史に関する次の記述のうち最も適切なものを1つ選べ。

- 東地中海沿岸で前2000年ころに始まったクレタ文明については、粘土板に残された線文字Aが解読され、貢納王政が成立していたことが明らかになっている。
- 前13世紀末から前12世紀初めにかけて民族系統不明な「海の民」が東地中海一帯を攻撃したことで、アラム人、フェニキア人、ヘブライ人に代わって、ヒッタイトが興隆した。
- ギリシア人は前8世紀ころから地中海沿岸にマッサリア、ネアポリスなどの植民市を建設したが、このことによって地中海にギリシア文化が拡大した。
- ペルシア戦争後、デロス同盟の盟主となったスパルタとそれに反発したアテネとが前431年に衝突し、ペロポネソス戦争が起こった。
- 地中海西方を支配していたカルタゴと衝突したローマは、3次にわたるポエニ戦争に勝利し、前3世紀には地中海世界を支配した。

問2 下線部（B）について、フランク王国に関する次の記述のうち最も適切なものを1つ選べ。

- 481年に全フランク人を統一したクローヴィスは、ランスの教会でアリウス派に改宗した。
- メロヴィング家の宮宰であったカール＝マルテルは732年にトゥール・ボワティエ間の戦いでアヴァール人を撃退した。
- カロリング朝を開いたピピンはイタリアのランゴバルド王国を攻め、756年にラヴェンナ地方を教皇に寄進した。
- 800年に教皇グレゴリウス1世がカールにローマ皇帝の帝冠を与えたことは、ローマ＝カトリック教会のビザンツ帝国への対抗措置でもあった。
- カール大帝の死後、843年のメルセン条約、870年のヴェルダン条約により、王国は東・西フランクとイタリアに分裂した。

問3 下線部 (C) について、次の記述のうち適切でないものを1つ選べ。

- a. デーン人はイングランドを襲撃し、七王国（ヘプターキー）を建てた。
- b. クヌート（カヌート）はイングランドを征服したほか、デンマーク・ノルウェーを支配した。
- c. ロロが率いた一派は北フランスに上陸してノルマンディー公国を建設した。
- d. 南イタリアではルッジェーロ2世によって両シチリア王国が建設された。
- e. リューリク（ルーリック）を首領とする一派はノヴゴロド国を建国した。

問4 下線部 (D) について、次の記述のうち最も適切なものを1つ選べ。

- a. 農民は農奴と呼ばれる不自由身分で、住居・農具の所有権も認められなかった。
- b. 秋耕地、春耕地、休耕地に区分する三圃制は、農業技術の進歩により二圃制へ移行した。
- c. 荘園領主に不輸不入権が認められることによって社会の分権化が進んだ。
- d. 古典荘園から地代（純粋）荘園への発展によって、領主による農奴支配が強化された。
- e. 農奴は荘園領主との間で臣従礼と呼ばれる儀式を行うことで、保有地を獲得できた。

問5 下線部 (E) について、次の記述のうち適切でないものを1つ選べ。

- a. 主従関係は双務的契約に基づいていた。
- b. 一人の家臣が同時に複数の主君に仕えることができた。
- c. 主従関係は封土を媒介としていた。
- d. 国王であっても他の諸侯に臣従することがあった。
- e. 主従関係の起源はローマの従士制とゲルマンの恩貸地制度にある。

問6 下線部 (F) について、中世都市に関する次の記述のうち最も適切なものを1つ選べ。

- a. 自治都市の市政を独占した同職ギルドにたいして商人ギルドが反発し、ツunft闘争を展開した。
- b. 12世紀以降にイタリア北部・中部で発展した自治都市はコムーネと呼ばれた。
- c. 都市間で同盟がつくられ、なかでもニュルンベルクを盟主とするハンザ同盟は北ヨーロッパ商業圏を支配した。
- d. 「都市の空気は（人を）自由にする」と言われたように、ドイツの自由都市は皇帝から独立し、自由かつ平等な住民によって自治が行われた。
- e. 都市の上層市民の中にはハンブルクのフッガー家のような富豪も現れた。

問7 下線部 (G) について、11世紀末ころに創立され、主として法学で知られたヨーロッパ最古の大学はどれか。

- a. ボローニャ大学    b. サレルノ大学    c. バリ大学    d. オックスフォード大学    e. パドヴァ大学

問8 下線部 (H) について、アリストテレスの著書はどれか。

- a. 『政治学』    b. 『神学大全』    c. 『歴史』    d. 『労働と日々』    e. 『君主論』

問9 下線部 (I) について、ロマネスク様式の代表的建築物として適切なものを2つ選べ。

- a. アミアン大聖堂    b. ピサ大聖堂    c. ケルン大聖堂
- d. ノートルダム大聖堂    e. ヴォルムス大聖堂

問10 下線部 (J) について、次の記述のうち最も適切なものを1つ選べ。

- a. イギリスは他国に比べ王権が強かったが、貴族の反抗に遭ったプランタジネット朝のヘンリ2世は、1215年に大憲章（マグナ＝カルタ）を認めさせられた。
- b. フランスではカペー朝のもとで中央集権化が進んだが、フィリップ2世は異端のアルビジョワ派を征服して王権を南フランスにも広げた。
- c. ドイツでは「大空位時代」ののち、カール4世が「金印勅書」を發布したことを契機として領邦の統合が進み、15世紀にはハプスブルク家によって帝国が統一された。
- d. イベリア半島ではカステイリヤ・アラゴン・ポルトガルの3王国が建てられたが、カステイリヤとアラゴンは1492年に統合し、スペイン王国が成立した。
- e. 13世紀末から独立闘争を展開していたスイスは、1499年に神聖ローマ帝国から事実上独立し、1648年のウェストファリア条約で独立が国際的に承認された。

Ⅲ 次の文章を読み、問1～10について、各設問の指示に従って選択肢の中から解答を選び、その記号をマーク解答用紙にマークせよ。

アメリカ合衆国の対外政策の変遷は、孤立主義と介入主義という一見矛盾する特徴を有している。

まず独立戦争後は、モンロー主義に代表されるように、ヨーロッパ諸国とは相互不干渉を提唱し、国内の発展に力を注いだ。(A) 他方で非ヨーロッパ諸国に対しては、特に国内でフロンティアが消滅すると、帝国主義的政策も展開するようになる。とりわけラテンアメリカ諸国に対して棍棒外交を繰り広げたほか、中国に対しては、門戸開放・機会均等および領土保全を提唱し、中国市場への進出を図った。(B) (C) (D)

二度の世界大戦および戦間期においても、ヨーロッパとの関係においては、当初は孤立主義的な立場を維持した。しかし、第二次世界大戦が激化しヨーロッパが疲弊するにつれて、アメリカ合衆国は世界における存在感を高めていく。なかでも、1944年8月から10月にかけて開催されたダンバートン＝オクス会議においては国際連合（国連）憲章の原案の作成に関与し、1944年7月に開催されたブレトン＝ウッズ会議においては戦後の世界経済秩序の構築を主導した。(E) (F) (G)

冷戦期においては、アメリカ合衆国の外交政策は介入主義的な色合いを強め、共産圏拡大の防止を目的とした介入を行った。冷戦終結後は、国連を重視する姿勢を見せたこともある半面、単独行動主義的な外交を進めることも少なくない。(H) (I) (J)

問1 下線部 (A) について、次の記述のうち、最も適切なものを1つ選べ。

- a. 1774年の第1回大陸会議では、ワシントンが植民地軍総司令官に任命された。
- b. アメリカ独立宣言は、『統治二論』（『市民政府二論』）を著したロックの思想の影響を受けていた。
- c. 「代表なくして課税なし」と反発を生んだ印紙法は、独立戦争後に撤廃された。
- d. フランスを除くヨーロッパ諸国は、独立戦争において中立を維持した。
- e. ボストン茶会事件後、イギリス本国は自治権強化などによりアメリカ植民地との融和を図った。

問2 下線部 (B) について、次の記述のうち、最も適切なものを1つ選べ。

- a. モンロー主義は、議会に向けた大統領の年次教書演説の形で発表された。
- b. モンロー主義は、ナポレオン戦争に対する中立宣言としても位置付けられていた。
- c. モンロー主義は、メキシコをはじめとするラテンアメリカ諸国の独立運動のきっかけとなった。
- d. モンロー大統領は、白人男性普通選挙制の採用など国内の民主化も推し進めた。
- e. モンロー大統領は、北部の資本家を支持基盤とする共和党に所属していた。

問3 下線部 (C) について、ラテンアメリカにおいてアメリカ合衆国が行った帝国主義的拡大に関する記述のうち、最も適切なものを1つ選べ。

- a. アメリカ合衆国の支援によってイギリスから独立したハイチを保護国化した。
- b. コロンビアから分離、独立したパナマから、運河の工事権と租借権を獲得した。
- c. アメリカ＝スペイン戦争（米西戦争）によって、プエルトリコとドミニカを併合した。
- d. メキシコの内乱に乗じて出兵し、カリフォルニア州とニューメキシコ州を獲得した。
- e. ラテンアメリカ諸国の連帯強化を目的に開催されていたパン＝アメリカ会議を廃止した。

問4 下線部 (D) について、19世紀半ばごろの中国に対するアメリカ合衆国の対外政策に関する記述のうち、最も適切なものを1つ選べ。

- a. アヘン戦争後、清と望厦条約を締結し、最恵国待遇や領事裁判権を認めさせた。
- b. アロー戦争後、清とアイグン条約を締結し、清に外国公使の北京駐在などを認めさせた。
- c. 清と虎門寨追加条約を締結し、他の列強に先駆けて上海に最初の租界を設置した。
- d. 清と北京条約を締結し、清と英仏との講和を調停した見返りとして沿海州を獲得した。
- e. 太平天国の乱においては、日本やロシアなどとともに出兵し、清朝を援護した。

問5 下線部 (E) について、この時期におけるアメリカ合衆国の対外政策に関する記述のうち、最も適切なものを1つ選べ。

- a. 1941年に武器貸与法を成立させ、イギリスのみならずソ連などにも軍需品を提供した。
- b. 世界恐慌が起きると、オタワ連邦会議（イギリス連邦経済会議）に出席するなど、イギリス連邦との経済関係を強化した。
- c. 第一次世界大戦の開戦時には中立を宣言したが、1917年に結ばれた石井・ランシング協定を根拠に連合国（協商国）として参戦した。
- d. 第二次世界大戦の開戦時には中立を宣言したが、フランスの降伏を機に連合国として参戦した。
- e. ロシア革命後にイギリスやフランスによって行われた対ソ干渉戦争を非難し、14カ条を発表して平和的解決を求めた。

問6 下線部 (F) について、国連憲章が採択された会議が開催された都市はどれか。

- a. アトランタ    b. サンフランシスコ    c. シカゴ    d. ニューヨーク    e. ワシントンDC

問7 下線部 (G) について、この会議において設立が決定された国際経済機関として適切なものを2つ選べ。

- a. 経済協力開発機構（OECD）    b. 国際通貨基金（IMF）    c. 国際復興開発銀行（IBRD）
- d. 産業別組織会議（CIO）    e. 世界貿易機関（WTO）

問8 下線部 (H) について、この時期におけるアメリカ合衆国の対外政策に関する記述のうち、適切でないものを1つ選べ。

- a. キューバ革命によって成立したカストロ政権の転覆を企てたが、失敗に終わり、カストロ政権は社会主義宣言を発表した。
- b. サンディニスタ革命政権が成立したニカラグアにおいて、反革命武装勢力を支援するなど、内戦に関与した。
- c. スカルノらによる独立宣言に反対して武力介入を行ったが失敗し、ハーグ協定によりインドネシア共和国の独立を認めた。
- d. 第4次中東戦争後、カーター大統領の仲介によって、エジプトとイスラエルとの間に和平を成立させた。
- e. 南ベトナムのゴ＝ディン＝ジエム政権の崩壊後、北ベトナムへの爆撃と南ベトナムへの地上部隊派遣を行った。



問9 下線部(1)について、アメリカ合衆国の国連外交に関する記述のうち、適切でないものを1つ選べ。

- a. 1950年6月に始まった朝鮮戦争においては、国連安全保障理事会が北朝鮮軍の撤退を求める決議を採択したことを受けて、アメリカ軍は国連軍の主体として参戦した。
- b. 1990年8月にイラクがクウェートに侵攻した際には、国連安全保障理事会の対イラク武力行使容認決議に基づき、アメリカ軍は多国籍軍の主体として参戦した。
- c. 1992年4月から始まった国連ソマリア活動において、アメリカ軍は人道援助を目的とする多国籍軍において中心的な役割を果たした。
- d. 1999年3月からアメリカ軍が行った Kosovo 空爆は、国連安全保障理事会の武力行使容認決議に基づいていなかったため、他国は参戦しなかった。
- e. 2003年3月からアメリカ軍などがイラクに対して行った武力攻撃は、国連憲章上の根拠に基づいているかをめぐって議論を呼ぶことになった。

問10 下線部(J)について、アメリカ合衆国の単独行動主義の例として、適切でないものを1つ選べ。

- a. 北大西洋条約機構(NATO)軍事機構からの一時脱退
- b. 京都議定書からの離脱
- c. 国際刑事裁判所(ICC)規程の署名撤回
- d. 弾道弾迎撃ミサイル制限条約(ABM条約)からの脱退
- e. 包括的核実験禁止条約(CTBT)の批准拒否

IV 次の文章を読み、問1~10について、各設問の指示に従って選択肢の中から解答を選び、その記号をマーク解答用紙にマークせよ。

20世紀初頭は、ヨーロッパにとって、急速に危険度が高まってきた時代でもあった。大きく二つの陣営が不信感を募らせて対峙し、各々の国の内部でも社会的・政治的闘争が活発化していた。1914年に始まった第一次世界大戦は、ヨーロッパを主戦場としつつも、短期的な局地戦にとどまることなく、ヨーロッパの列強のみならず中小の国々、ロシア、列強の支配下にあったアジアやアフリカの一部、アメリカ合衆国などを巻き込む総力戦となり、主要交戦国は秘密裡の外交手段をも駆使した。1918年に大戦は終結したが、翌年1月パリで開かれた講和会議は、平和再構築や国際秩序の再編を目指す面もあったが、主要戦勝国英・仏の首脳協議が決定的な重要性を持つかたちで進行し、ドイツは同年6月ヴェルサイユ条約に調印、その後他の同盟側敗戦国も各々講和条約に調印した。

ヴェルサイユ体制を維持する場として1920年に発足した国際連盟は、史上初の国際平和と安全保障を希求する組織だったが、国際協調の中心としての意義は限定的で、世界恐慌以降深刻化した対立を調整し、第二次世界大戦の勃発を防ぐことはできなかった。

第二次世界大戦終結後のヨーロッパでは、冷戦構造の形成下で、アメリカ合衆国の対ソ連戦略とも絡んで、西ヨーロッパの復興と協調が図られ、ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体(ECSC)、ヨーロッパ経済共同体(EEC)、ヨーロッパ原子力共同体(EURATOM)が発足した。それらに基づいて1967年ヨーロッパ共同体(EC)が誕生し、市場および通貨統合の模索や冷戦体制の終焉などを経てヨーロッパ連合(EU)が成立し、単一通貨ユーロが誕生、さまざまな課題を抱えつつも加盟国は増大し続けている。

- 問1 下線部 (A) について、二陣営形成の基盤となった協定に関する次の記述のうち適切でないものを2つ選べ。
- a. ドイツとオーストリアは、三帝同盟の空文化に備えて独逸同盟を1879年に締結した。
  - b. ドイツはロシアがフランスに接近するのを防ぐため、1897年ロシアと再保障条約を締結した。
  - c. 露仏同盟は、プロイセンとの戦争以来孤立傾向にあったフランスとロシアが1890年代前半に結んだ政治・軍事同盟である。
  - d. フランスがチュニスを占領すると、イタリアはドイツとオーストリアに接近し、1882年三国同盟条約が成立した。
  - e. 三国協商は、1904年の英仏協商、1907年の英露協商、1908年の露仏協商成立の結果形成された軍事・外交的協力関係の総称である。

- 問2 下線部 (B) について、以下に挙げた関連事項・事件とそれに深く関わった人物名との組み合わせとして、適切でないものを2つ選べ。
- a. ドレフュス事件の再審請求運動 —— ソラ
  - b. アイルランド自治法案の提出 —— ディズレーリ
  - c. ドイツ社会民主党の躍進 —— ハイゼンベルク
  - d. 血の日曜日事件 —— ガボン
  - e. ボスニア・ヘルツェゴヴィナ併合 —— フランツ・ヨーゼフ1世

- 問3 下線部 (C) について、ドイツ軍が初めて毒ガスを使用したとされる戦いはどれか。
- a. マルヌの戦い      b. タンネンベルクの戦い      c. イープルの戦い
  - d. ソンムの戦い      e. ヴェルダンの戦い

- 問4 下線部 (D) について、パレスチナ地域の国際管理を取り決めたのは以下のうちのどれか。
- a. サン＝ジェルマン条約      b. ロンドン秘密条約      c. バルフォア宣言
  - d. フセイン・マクマホン協定      e. サイクス・ピコ協定

- 問5 下線部 (E) について、国際連盟に関する次の記述のうち適切でないものを1つ選べ。
- a. 社会主義国ソ連は当初排除されたが、ナチスの台頭に伴い、アメリカ合衆国が1933年ソ連を承認した後、1934年に加盟した。
  - b. 旧敗戦国オーストリア、ハンガリー、ブルガリアに続き、1926年にドイツの加盟が認められた。
  - c. 当初からの常任理事国はイギリス、フランス、イタリア、日本だった。
  - d. 本部が置かれたジュネーヴには、付属機関として国際労働機関および国際司法裁判所も設置された。
  - e. アメリカ合衆国は国際連盟に加盟しなかったが、ワシントン海軍軍備制限条約や九カ国条約などの締結を通じ、国際的な発言力を強めた。

- 問6 下線部 (F) について、次の記述のうち適切でないものを2つ選べ。
- a. 西ヨーロッパ諸国の復興と共産主義勢力封じ込めのため、アメリカ合衆国のマーシャル国務長官が1947年に提案した経済復興計画の受け皿の1つとして発足した。
  - b. フランス外相シューマンが発表した石炭・鉄鋼の超国家的共同管理を柱とする経済および安全保障組織構想に基づき、1951年パリで調印、翌年発効した。
  - c. 設立の趣旨には、長年ドイツとフランスの紛争の火種となってきたアルザス・ロレーヌ、ザール、ルール地方を二度と戦地にしないという願いも込められていた。
  - d. 調印には、西ドイツとフランスに加え、イタリア、オランダ、ベルギー、ルクセンブルクが参加した。
  - e. 1958年に調印されたブリュッセル条約に基づき、EECに発展した。

問7 下線部 (G) について、1973年のイギリス、アイルランド、デンマークのEC加盟に続き、1980年代に加盟した3カ国を以下に挙げたものから選べ。

- a. アイスランド    b. スペイン    c. ポルトガル    d. オーストリア    e. ギリシア

問8 下線部 (H) について、関連した以下の出来事を正しく時代順に並べたものはどれか。

- ① 新ベオグラード宣言
- ② 中距離核戦力全廃条約の調印
- ③ ソ連共産党の解散
- ④ 東西ドイツ統一条約の調印
- ⑤ ハヴェルのチェコスロヴァキア大統領就任

- a. ①—④—②—③—⑤    b. ②—③—①—⑤—④    c. ③—①—④—②—⑤  
d. ②—①—⑤—④—③    e. ①—②—④—⑤—③

問9 下線部 (I) について、以下の動きのうち、EECからEUへの組織的な発展に含まれないものはどれか。

- a. 欧州通貨制度 (EMS) の発足
- b. ヨーロッパ自由貿易連合 (EFTA) の発足
- c. 単一欧州議定書の発効
- d. シェンゲン協定の調印
- e. マーストリヒト条約 (EU条約) の採択

問10 下線部 (J) について、ドイツ連邦共和国に統合したドイツ民主共和国 (東ドイツ) を除いた旧社会主義圏諸国で、EUに加盟後、2010年以前に統一通貨ユーロを導入した国を以下に挙げたものから1つ選べ。

- a. ポーランド    b. ブルガリア    c. スロヴェニア    d. ハンガリー    e. ルーマニア

[以下余白]